

沖縄の民間宗教の研究 (その三)

田路 慧

縄文時代の信仰との対比

日本本土でも霊石・石神信仰及び再生信仰は原始以来の伝統的・根源的なものである。石・岩は旧石器・新石器・縄文時代・鉄器が一般に普及するまでの弥生時代・古代社会での生活必需品であった。石の文化は鉄の文化よりも遙かに永いのである。これらの時代の人々にとっては石には特別な思いが籠められていたであろう。また縄文時代においては人々の平均寿命は男性で三〇歳ぐらい、女性で二七・八歳ぐらいであったといわれている。特に出産における妊婦と新生児の死亡率は相当高かったようである。出産において妊婦と新生児を喪った悲哀は現代より遙かに深く激しいものであったであろう。それだけ靈魂の存在と再生への願望と信仰は強いものであったと思われる。

縄文遺跡より出土する土偶の殆どは乳房があり腹部の大きい妊婦のもので、顔は抽象化されているか異形のものが多い。特にサンクスをかけたような目をした遮光器土偶と呼ばれるものも数多く出土している。初期の土偶や石で造られた岩偶は乳房と丸い腹部と女性器らしき印を持った胴体だけのものが発掘されている。岩偶から土偶へと発展したものと思われるが、女性の胴体だけの岩偶や土偶はそれに込められた人々の思いが推測できる。縄文前期の土偶は殆どが壊されればらにされた状態で出土している。(写真106)は

長野県棚畑遺跡より完全な形で出土した国宝の縄文のビーナスと呼ばれる土偶、(写真107)は遮光器土偶である。

これらの土偶は何を表すのであろうか。まずこの世に無念の思いを残して死亡した妊婦の霊を慰め祀りあの世へ送って、壊すことよって再生を祈願したものと思われる。異形の顔は死霊を表すと見なされるのである。次に妊娠出産という女性の神秘的な働きに靈的な力を見て生命の再生と豊饒を祈願して壊し大地にまいたと考えられる。さらに妊婦像を自分たちの生命の根源と見なして子孫を愛護し永続

と繁栄を保証する母靈神ないし祖(母)靈神として祀り崇拜、信仰したと考えられている。縄文中・後期の土偶は壊されなくなり、祭りや祈りのための神像となったようである。縄文後期には両手を合



写真107

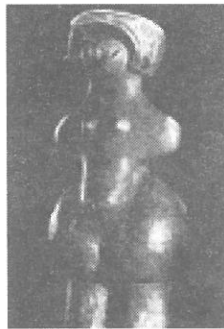


写真106

わけて祈るといふかたちが成立したようで、八戸市の風張遺跡から「合掌土偶」が出土している（写真108）。



写真108

生殖における男性器の役割も重視され、男女性器を彫り込んだり描いた土器も数多く出土し、また女性器を彫った石や石棒と呼ばれる男性器状に加工した石も多数発掘されている（写真109・110）。これらの性器を型どった石製品はおそらく子授けや豊饒・繁栄を祈願するために祭祀などで使用されたものと見なされている。

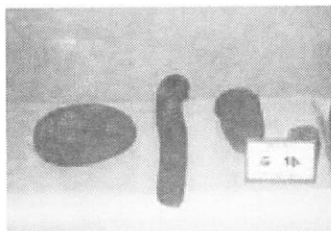


写真109

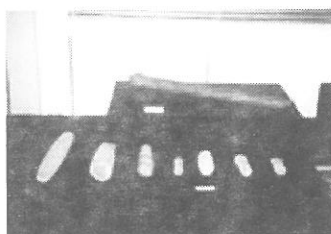


写真110

（写真111）は長野県佐久市の高さ二メートル余の大石棒である。横にあるのは女石のようで、側の丘に縄文の遺跡があるので、この石棒を祖霊神の依り代としてこの周りで再生と豊饒祈願の祭祀が行われたのであろう。（写真112）は伊那市の縄文遺跡の環状列石の中心にある大石棒である。



写真111

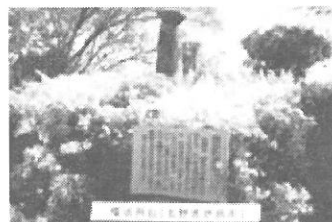


写真112

縄文時代の祭祀場と見られるものに直径一メートルもある栗の大木で造られた巨大な木柱を円環状や長方形に立てた遺跡が北陸や東北で発掘されている。（写真113）は青森県三内丸山遺跡、（写真114）は石川県チカモリ遺跡、（写真115）は同県間脇遺跡のもので、いずれも復元されたものである。チカモリと間脇遺跡の木柱は半分に割り丸い方を内向きにして立てられている。鉄や機械のない時代、どのようなようにして切り、運び、加工し、立てたのか不思議である。同じ多数の人々の共同、協力がなければ建設不可能であったことは事実である。神々と信仰を同じくした祭祀共同体があったと思われる。

樹木を祖霊神の依り代として立てて祭祀を行うことは伊勢神宮をはじめ各地で行われてきたが、特に有名なのが諏訪神社の御柱である（写真116）。男性の象徴としての木柱を立てて祖霊神を招来し、生殖力・活力・靈力にあやからんと繁栄と豊饒を祈願する風習はチベットやベトナムなど東南アジア各地にも見られる。



写真116

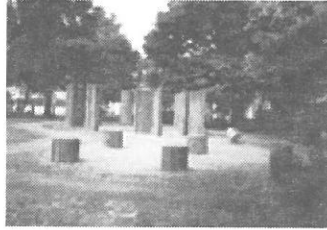


写真114

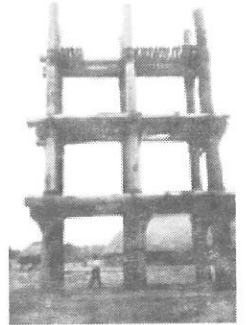


写真113

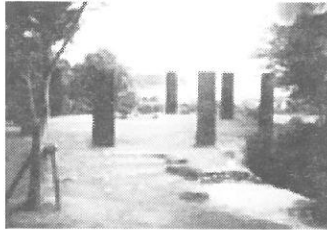


写真115



写真117

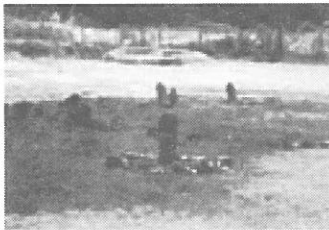


写真118



写真119

縄文時代の遺跡で特徴的なものに環状列石と呼ばれる遺跡がある。代表的なものは石を環状に配列し、その中に立石と横石が日時計状に組み合わされたものが幾つか配置されている。謎の遺跡とされてきたが、墓地・祭祀場ではないかと見なされている。男女の交合を象徴する石組みで、祖霊を迎え繁栄と豊饒と再生を祈願する祭祀の場であったのであろう。

（写真117）は秋田県大湯環状列石の万座遺跡、（写真118）は同じく野中堂遺跡のものである。（写真119）は山梨県金生遺跡のもので男性の象徴がよくわかる。（写真120）は北海道の忍路環状列石、（写真121）は同じく地鎮山環状列石で墓抗が保存されている。（写真123）は岡山県吉備津彦神社にあるものである。なお古代ストーン・サークルはイギリスや、世界各地に見られる。縄文時代の村落は祭祀場を中心に家屋が建てられているが、これは鎮守の森や御嶽を中心の村造りとなつて続いているのではなからうか。

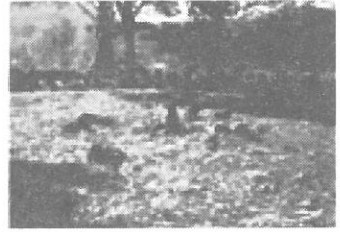


写真120



写真121



写真123

(写真124)は石冠と呼ばれている用途不明の石器であるが、これも男女の交合を象徴する祭祀用のものではないかといわれている。弥生時代になると男女性器を表象する石器は木によっても作られるようになる。(写真125)は御物石器と呼ばれる石器であるが、これも使途不明で、やはり祭祀用の石器ではないかとみなされている。

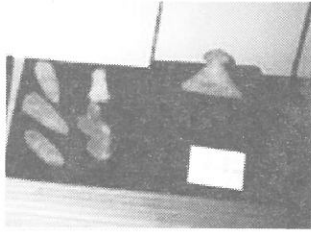


写真124

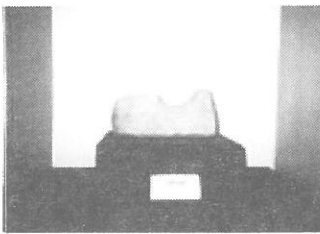


写真125

これらの男女性器を象徴する石器は祭祀用としてだけでなく、首飾りや貝の腕輪などと共に護身や魔除け、祈願成就の呪物としても用いられたのではないかと考えられている。縄文遺跡では土製の仮面が各地で出土している。(写真126・127)は間脇遺跡で発掘された仮面の破片とその復元である。



写真126



写真127

祭祀の時などに仮面を付けて祖霊神などを迎え、憑依して神の言葉を伝えたり呪術を行うシャーマンのような人物がいたのではないかと考えられている。沖縄八重山の盆アンガマのように翁や媼、あるいはひよつとこやお多福、天狗などの仮面を付けて霊界や異界からの来訪者を表象することは現代でも各地で行われている。やがて弥生時代となって専門的な霊媒者・巫女が出現することになるのである。

(写真128・129)は間脇遺跡のイルカの骨の集積の下より発掘された異形の堀込みが施された木柱とその復元である。捕獲され肉や骨、油を提供してくれたイルカの霊を慰霊しあの世に送る儀礼のために

に立てられた木柱ではないかと考えられている。人間以外に靈魂の存在を認めていた証拠ということができよう。

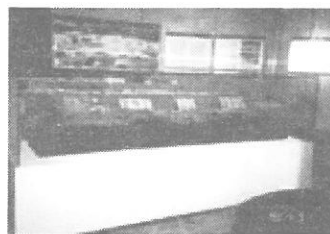


写真128



写真129

このように縄文時代の人々は靈魂の存在とその再生を信じていたが、特に夭折した子どもへの再生願望が強かったことが伺える。幼児の骨を入れたと思われる甕に、幼児の靈が子宮に入るところを描いたと思われる図が彫り込まれたものや、まさに産まれんとする赤ん坊を浮き彫りにした甕なども発掘されており、夭折した子どもへの哀切の思いが伝わってくる。

日本古神道との対比

岩石への崇拜は神が降臨し鎮座する磐座や磐境信仰となり、日本全国至る所に見られる。日本最古の神社といわれる大神神社のご神体は三輪山であるが、その頂上には多数の巨岩があり磐座として祀られている。それらの中心にあるのが男岩と女岩の対の磐座である(写真130)。大神神社の氏子達にはそれぞれ自分の家の靈石や靈樹があり年末にはお参りし清掃して注連縄を張り替え礼拝している(写真131)。



写真130



写真131

いかめしい立石・立岩が林立しここに岩窟がある山形県の立石寺は岩石・磐座信仰の典型的な聖地であり、仏教寺院はこのような古代の聖地に建立され、磐座に磨崖仏が彫られているようである。

三輪山のように磐座にも男岩と女岩が対で祀られている場合が多い。(写真132・133)は熊野の神倉神社のものである。(写真134・135)は遠野市の程洞金精様で、祠の祭神は(写真136)のように男性自身である。



写真132



写真133



写真137



写真138



写真139



写真143

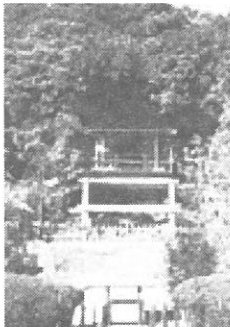


写真144



写真134

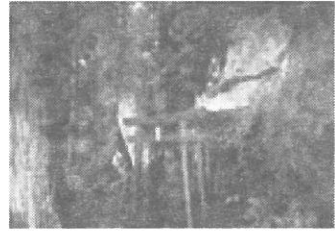


写真135

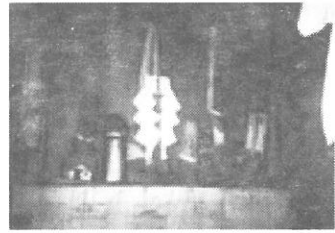


写真136



写真140

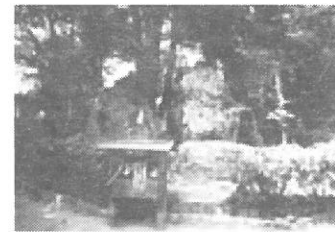


写真141

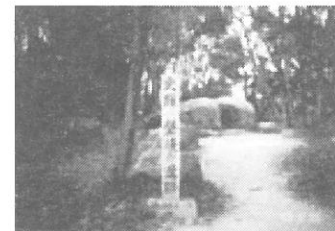


写真142

(写真137・138)は能登半島奥地の古代祭祀遺跡・石仏山の磐座である。社殿はなく三メートル余の男岩の前で現代も三月に祭祀が行われ、古神道をよく伝えている遺跡とされている。(写真139)は飛鳥坐神社の対の磐座で、このようなセツトの磐座が境内至る所にある。(写真140)は山口県油谷付近の立岩で岩上に小さな祠が祀られている。(写真141)は倉敷市阿知神社の磐座で、(写真142)は岡山市の磐境である。古代祭祀遺跡にも男岩・女岩の対の岩が選ばれている。

和歌山県白浜町の阪田山祭祀遺跡は神籬形式の古代祭祀場の様相がよく保存されている。社殿はなく磐座とその前に常磐木に囲まれた聖地がある。御神体の磐座は男女の象徴を彫り込んだ岩のレリーフである(写真143・144)。現在は縁結び・夫婦和合・子授け・安産・家内安全・五穀豊穰を授ける歓喜神社として祀られている。なお境内の白浜美術館には多数のインドやチベットの男女和合のミトナ像や歓喜佛が展示されている。

縄文時代の石棒(男根) 信仰は古代から現代に至るまで金精(金勢) 信仰として脈々と受け継がれている。金精様あるいは金勢神社は全国各地にあり、社の中には大小様々な木製の男根が祀られ奉納されている。子授けを願う夫婦の名前を書いたリアルな男根も多い。(写真145)は島根の八重垣神社、(写真146・147)は岡山県吉井町の金勢神社のものである。

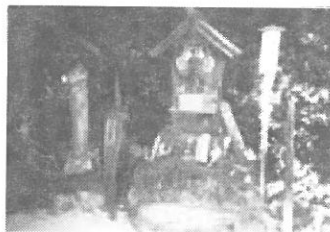


写真145



写真147



写真146



写真148



写真149

元来性は生命の大元であり生のエネルギーの源泉であり男女の関係の紐帯であり生命を産み出す根源として、また再生への原動力として、霊的なもの霊力あるもの聖なるものとして崇拜・信仰されてきたのである。太古以来産土の神々が鎮座する鎮守の森も半円形のこともりとした森と樹木の生い茂った長い参道を持ち、あたかも女性の象徴の如くである。その名の通り生命の根源、生殖と再生を象徴したものと思われる。

さらに性は悪霊や魔力、邪気を防ぐ霊力あるものとして、道の神・塞の神・道祖神として村の境などに祀られてきた。普通は男女の自然石で、藁や縄などで作られた男女の象徴が掲げられたものもあるが、やがて男女和合ないし交合の浮き彫りのある石が道祖神として祀られるようになった。(写真148・149)は長野県安曇野の男女和合の道祖神である。道祖神は魔除けとしてだけでなく縁結び・夫婦和合・子授け・招福除災の神としても信仰されている。男女交合の道祖神は明治政府の宗教支配政策以来金精神と共に撤去されてきたようである。

飛鳥坐神社では現代でも二月の祭日には五穀豊穡・子孫繁栄祈願のため、田植えの所作と共に男女交合の所作が奉納される。また境内では天狗の面を着けた男が男性のシンボルを表す青竹をもって無病息災や子授けのために男女の尻を叩いて回る（写真150・151・152）。愛知県田形神社の祭りでは巨大な男根の御輿が練り歩き、クライマックスでは女陰に見立てた家門に突入する。田形神社境内は御神体をはじめ陰陽石が至る所に見られる（写真153）。

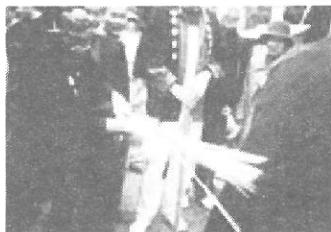


写真152

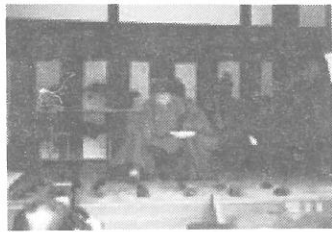


写真150



写真153

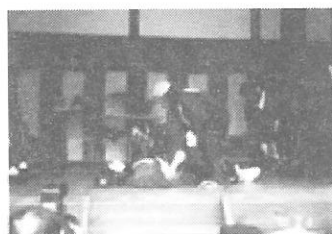


写真151

男女の象徴への信仰、男女交合による解脱・再生信仰はインドのヒンドゥー教にも顕著である。ヒンドゥー教の主神・シヴァ神は男根をもって象徴され、シヴァリングと呼ばれる。ヒンドゥー教寺院の御神体は妻のヨーニ（女陰）と結合したリングであり、寺院の外壁は多数のミトウナ（男女交合の浮き彫り）によって飾られている。シヴァ神のシャクティ（性力）信仰は仏教に取り入れられタントラ仏教、密教となり、チベット仏教や密教の歓喜仏となり、やがて日本に入って真言立川流へと展開する。いずれも男女交合の性の霊力によって解脱し現世成仏をめざすものである。再生信仰は昇天や輪廻の思想、浄土往生の思想となつて展開するのである。

西洋においても男性の象徴は創造力の根源として屹立した男根ファロス崇拜して古代より広く行われていたようである。このように性は元来、生命の元、創造力・再生力の根源として霊的な聖なるものであったのである。

オナリ・ニーガン・ノロ

縄文時代の女性の機能を強調した土偶は、先史時代共通の大地の万物を産み出す力と女性の生命を生む力を重ねて霊力を認め聖なるものとして崇拜する母神崇拜・地母神信仰があったことを示していると思われる。古代社会においても卑弥呼の例や天照大神の神話を見ても、女性が霊的な力を持つものとして認められていたことがわかる。日本各地で巫女が霊的世界の司祭者として活躍したのではないかと思われる。また天照大神と素戔嗚尊、卑弥呼とその弟の関係や、恋人どうして妹（姉妹）・背（兄弟）と呼び合うように、『古事記』の記述を見ても姉妹・兄弟は特に強い絆で結ばれていたようである。

沖縄でも女性は霊力（セジ）の高い神的存在と見なされ崇め恐れられてきたようである。神や祭りの司祭者は殆ど女性である。沖縄では兄弟・姉妹はエケリ・オナリと呼び合い特に強い絆で結ばれている。オナリ（女性）は強い霊能力をもってエケリ（男性）を守

護すると信じられ、オナリ神として信仰されている。エケリ達は旅や航海や遠征に出かけるときは、オナリ神がふだん使っている手巾や髪の毛をもらっていく風習があった。いざというときにオナリ神が守護してくれると信じられていたのである。オナリ神は中国南部や台湾で航海の守護神として信仰されている姉妹神媽祖(天妃)信仰と類比される。那覇と久米島に天妃宮が祀られている。(写真154)は那覇市の天妃宮と道教の寺院である。



写真154

村の宗家のオナリ神がニーガン(根神)として、村の霊力の強い女性の中から選ばれた神女・神役の主導者となってニツチュ(根人・男の神役)を従え、村落の神々の祭祀を司るのである。ニーガンはいはば村全体のオナリ神なのである。いくつもの村落を支配する按司が現れると、按司の姉妹がオナリ神として支配地域の祭祀を主宰するようになり、ヌルあるいはノロ(祝女)と呼ばれた。琉球王府の時代になると王の姉妹がオナリ神として最高位のノロとなり、聞得大君と呼ばれ、祭祀や宗教の最高の支配者とされ、王や王府を守護し支え、時には影響力を示した。王府は各地のノロを再編成し、新たに公的辞令(公儀ノロ)と俸禄(ノロクモイ地)を付与し、聞得大君を頂点とする宗教的支配のノロ制度が確立した。しかし各地方の土着の村ノロ・神女による祭祀も続けられた。明治になるとやがて公儀ノロは姿を消し、また村ノロも少なくなっているようである。浜比嘉島のノロの家(殿内)を訪ねてみたが、ノロはかなりの高齢で言葉が通じなかった。現代はニーガンもなり手が少なくなっている

るようである。ノロや神女達が集まって祭祀を行う場が御嶽や神アシヤギヤトウ(殿)である。(写真155)は久高島の殿、(写真156)は伊是名島の神アシヤギである。(写真157)は宮古島の上比屋山遺跡にあるウイビヤムトウ祭祀場の多数ある神女達の籠り家の一つである。沖縄では祭りや家庭の祝い事に山羊を落として祝宴に供することが多く、各地で山羊が飼われている。また沖縄の郷土料理としても山羊肉料理は有名である。(写真158)は筆者について来た波照間島の放し飼いの山羊の母子である。

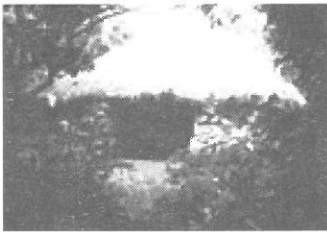


写真157



写真155



写真158



写真156

沖繩の多彩な祭りについては『おきなわの祭り』（沖繩タイムス社刊）に詳しい。祭られる神々も各地方によって多種多様である。筆者は勤務の關係で沖繩訪問の時期が悪く祭りを直接見学できなかったのが残念である。

ユタ

ニーガンやノロ・ツカサなど神女達は巫・巫女あるいはシャーマンにあたると思われるが、最もシャーマンらしいのはユタ（宮古ではカンカカリヤ・八重山ではニガイビト・カンピトウ・ムヌチなど）である。

元来ニーガンもノロもユタも村落の女性のなかで特にセジタカウマリ（靈力の高い生まれ）の女性となり、元々ユタは共に祭祀を行っており、ニーガンやノロの選考にも関与したようである。

神ダリーイ（神憑かり）したユタは神や靈との直接的な交流において人々の私的な靈的・呪術的信仰・儀礼に関与していた。しかし按司・琉球王府時代になってニーガンやノロが宗教的支配の中に組み込まれ、いわば村落の公的な神靈祭祀の主事者となって私的なことには関与しなくなり、さらに死や死靈、葬儀や洗骨、脱靈や浮遊靈、血の忌みや出産、病氣や除災などを不浄なこととして強く忌避するようになった。そこで各家庭の死者供養や死靈祭祀、個人的な靈的問題や心理的問題、吉凶禍福の占い、病氣や災厄問題、家族問題、新築や移転、不安や苦悩など、私的な問題を口寄せや呪術によって解明・指示・解決せんとするシャーマン・靈媒者が特にユタなどと呼ばれ、人々に頼りにされ信仰されるようになったのである。ユタは理解を超えた不安や苦悩、病氣や災厄などに苦しむ人々、特に女性の心の拠り所であった。ユタは底辺の民衆のためのカミンチュなのである。風土的歴史的に生存条件の非常に厳しい沖繩においてはユタの果たす役割は大きかったと思われる。

ユタは男性も少しはいるが殆どが女性である。ユタになる女性は

幼少期からセジタカウマリで靈や神事に敏感で靈能力が強く気味悪がられたりする者が多い。また生活の困苦・家庭の不和・離婚・災厄・大病・挫折などを契機にカミダリーイ（神憑り）という心身の異常状態（巫病）に陥り、神に関わる夢や幻覚・幻聴が多発し苦しみ、御嶽やグスク、ガマなどを巡り歩き自分の神を捜し、そのうち神の使者・靈媒者になれとの神の声に追われるようになる。辞退しても神は迫り続けるので先輩のユタの家ユタヌヤを歴訪し指導を受けるようになる。そうしている内にウヤファージ（祖先の道）を悟り、神・靈と直接交流できるようになり、呪術の作法ユタグトウ（巫儀）も修得し、神からチヨウブ（帳簿）をいただき、靈感力・超能力が身に付く。かくてチジがアイテ（ミチアキ・成巫）、カミダリーイも治まり、ユタとなるのである。その頃になると自然に人々に知られ、依頼人が集まるようになる。また自分の子どものカミダリーイを治そうと必死に御嶽巡りやユタ歴訪を続けている内に神示を受け自分がユタになる人もいるようである。

近來ユタ職が儲かるのでカミダリーイ無しに巫儀を習い自称ユタとなる人も多い。こういうユタはウマリユタと区別してナライユタとかユタマンチャー（ユタまがい）と呼ばれている。

ユタの主要な役割はハンジ（判じ）である。依頼者の家や個人の災厄・不幸・病氣・家族問題・不安・懸念などの原因を究明判断することである。ユタは祭壇の神前に線香を立て依頼者の年齢と依頼内容を神に告げグイスを称えて祈る。程なく神の姿が見え声が聞こえ、その告示が線香の燃え具合などによって表示され、それに基づきユタはハンジをする。また口寄せといって神や生靈・死靈がユタに憑依しトランス状態に陥ったユタの口を通してその思いや意志が告示されることも多い。災厄や不幸の原因は葬儀をされていない死靈・浮遊靈の祟りや祖靈供養の不足、御嶽への御願不足などやシジタダシ（筋目直し）といって男系の家の相統がうまくいっていないこと、またタチーマジクイといって他系統の血が交わっていることが挙げ

られることが多いようである。そこでユタを主導者として靈魂に關する儀礼が行われることとなる。一般的には依頼人の苦悩や不安を聞いて心を癒し呪術などによって問題解決の方向を示し元気を付けるカウンセラーの役割を果たしているようである。ユタと依頼人を媒介し巫儀の補助するのがナカムチ(仲持ち)である。口寄せ時のユタの言葉・ユタグチは独特で分かりにくいので依頼人に分かり易く説明することも行う。

死者儀礼・供養に関するユタの役割はマブイワカシ(魂分かし)である。死者が出るとユタは死者のシニマブイ(死靈)のユータチ(口寄せ)をし、死者の思いを家族に伝え、死靈をイチミ(この世)に思いを残すことなくグシヨ(後世)に旅立たせる。家や村から死靈・悪靈を祓う儀式も行う。さらにシンクチ(洗骨)の儀礼もユタのハンジと主宰によって行われる。また異境で客死したり非業の死を遂げた死靈の死に場所をハンジ、死地から死靈を離し実家の墓に連れ帰るヌジファの儀礼もユタの重要な役割である。

さらにユタの重要な役割にマブイグミがある。人が思いがけない事故にあつて大けがをしたり原因不明の大病にかかつたり、子どもが食欲をなくし精気が全く見られなくなつたときなど、イチマブイ(生靈)が当人から脱落しマブイウトウシ(魂落し)になつたとみなされ、ユタを呼んでマブイを落とした場所をハンジ、マブイを拾つて元に戻す巫儀、即ちマブイグミ(魂籠め)を行つてもらふのである。

このようにユタは沖縄の底辺の民衆の中に深く根を下ろし民衆の精神的・宗教的拠り所として多くの役割を果たしてきたのである。しかし琉球王府の成立と共に、その宗教的支配体制に組み込まれない神女・ユタを、また先祖の祟りと脅して高額の供養料や祓い料を強要するユタマンチャーが跋扈したりしたこと、トキ・ユタ邪術禁止令などを出して激しく弾圧、処刑、迫害し続けたのである。いわゆるユタ刈りである。トキはサンジンソウ(三世相)と共に男性の占いで、ユタ同様民衆の中に根付き存続している。琉球処分

以降明治政府になつてもトキ・ユタの禁止、弾圧、迫害は繰り返され続けた。また教育の普及と共にユタ等は知識層より迷信の塊、公序良俗を乱す者、虚言をもつて人心を迷わせ巨利をむさぼる魔術師などと軽蔑、非難、排除された。特に沖縄では娘が遺産や位牌を相続・継承するイナググワンス(女元祖)を強く忌避する根強い風習があるが、ユタがシジタダシでこの慣習を支持するので、法律家や進歩的女性から強く非難排撃されることが多い。

筆者は直接ユタに話を聞きたいと思ひ、民宿や居酒屋、沖縄の教え子などに頼んだが、皆気味悪いとユタに否定的で断られた。教え子の紹介で一人のユタに面接を申し込んだが残念ながら断られた。このようにユタは常に弾圧排撃蔑視され日陰に追いやられ続けてきたが、根強く生き延び、特に甚大な犠牲を払われた沖縄戦では死に場所不明の犠牲者が数え切れないほど出て、死靈の死に場所のハンジと死靈を実家の墓に納めるヌジファが必要となつて、ユタの需要が高まり、また米軍の軍政下で過酷な状況に置かれた女性達にとつてユタは心の拠り所となつた。現在ノロはほぼ衰滅し、ニーガンも減少しつつあるといわれている。しかしユタは民衆の中に根強く生き続けているのである。

日本本土でノロ・ユタ・トキ・サンジンソウに当たるのは巫女・陰陽師や山伏であり、東北地方のイタコやオガミンないしカミサマであり、街頭の易者・占い師であり、霊能力を持ったという教祖やオガミヤ、生神・生仏であろう。この世に人間の理解を超えた不安や苦悩、災厄や病気がある限り靈魂の問題とそれに取り組みむシャーマンとシャーマンもどきは絶えることはないようである。

シャーマニズムは初期宗教に於て世界各地に共通に見られる。イエスもムハンマドも最初は霊と交流し妖術を行うシャーマンと見なされてきたようである。ヨーロッパ各地の石や水や森の精霊や祭祀儀礼を行うシャーマン達も最初はキリスト教と共存していたが、十三世紀頃からの教会によるキリスト教純化運動の過程で魔女や妖術

術師として断罪され何百万人も火刑などに処せられた。しかし伝統的な民間宗教は様々なかたちで底辺や地下で生き続けた。地母神崇拜はマリア信仰に凝縮し民衆の中に生き続けていると思われる。

結 語

筆者が原因不明治療法無し難病にかかり大学病院に入院していた時、毎日何人も死者が出るのを見て、それまで無関心であった死について深く思うようになった。そうして死に関する書物を読んでいる内に、これまで無視していた宗教に関心をもち宗教書を読みあさるようになった。やがて日本だけでなく世界各地で新宗教やカルトによる陰惨な事件が頻発し、またいわゆる高等宗教といわれる一神教による悲惨な戦争や虐殺も続いている状況となつて、本来の宗教とは何か、信仰や教義による対立・闘争・迫害、戦争や虐殺をもたらさない宗教はないのか、という疑問を抱き様々な宗教文献を読み続けている内に、教祖・宗祖の宗教ではなく民間宗教の中にある答えがあるのではないかと思うようになった。そして民間信仰や民俗学の書物を読み込んでいく内に、沖縄の民間信仰や縄文時代の宗教に関心を持つようになった。それらの文献を集め読んでいったが、宗教はいわば理論よりも感情や情念、感性や靈性の問題であるので、今ひとつ感得できないところがあった。そこで実地に行つて自分の目と耳で見聞し、確認することにしたのである。かくて機会を作つては沖縄各地を訪ね、また日本各地の縄文や弥生時代の遺跡、資料館・博物館を訪れ、さらに北海道のアイヌやウイльтаなど北方民族の資料館や博物館、台湾の原住民の村や資料館を訪ねて民間宗教の実態を見聞した。その間、日本文化の基層は縄文文化にあり、それは沖縄とアイヌの文化に受け継がれ続けている、という梅原猛氏の講演を聴き意を強くした。以来十数年やつと文章にすることができたが、沖縄文化も縄文・弥生文化も非常に多彩で奥が深く、ほんの表面の一面に触れたに過ぎない思いである。本論ではアイヌや北方民族、

台湾原住民の宗教については述べることができなかつたが、それらも祖霊崇拜・アニミズム・シャーマニズムにおいて共通するところが多かつた。

宗教の源泉は単純明快で、産まれ・生き・子孫を残し・死ぬという生命活動そのものの中にあつた。生命を産み育み支える日・月・火・水・木・金(岩石)・土など自然そのものと祖先への畏敬と帰依の念・心情、そして無病息災と死の不安・恐怖の慰撫、再生願望が宗教の基底となつているのである。生命の根源に神を見、生命を育む自然の中に神霊を見る宗教は、全人類共通のものであり、先史時代から今日まで民衆の心の中に生き続けている。万物の内に靈魂や生命力(マナ)を見、畏敬信仰する宗教はアニミズム、アニマティズムと呼ばれ宗教の本質、宗教の基層をなすものとされている。一方唯一絶対の超絶神をたてる一神教の宗教からは低位のものとなされ、科学的合理主義の立場からは迷信として無視・蔑視されるようになった。

しかしながら唯一絶対神の下の一神教や絶対的教祖を持つ宗教教団の対立・闘争・迫害・戦争・虐殺はますます激しくなり、科学技術による自然の破壊や生命の操作は、生命そのものの存続すら危うくしている。いわゆる科学的合理主義による実験・実証不可能なもの、靈魂や来世・異界などの否定・排除は人々から想像力やロマンを喪失させ、現世の快楽のみを追求する刹那的享楽主義をもたらし、いたるところで倫理・道徳の根本を掘り崩しているように思われる。

死と再生については、われわれ生命体は細胞の新陳代謝によつて死と再生を繰り返しながら生きていくし、社会的にも退職や離婚など死と再生を繰り返すし、精神的にも苦悩や絶望において死し再生する。様々の成人儀礼も子どもとして死に大人として再生するイニシエーションである。最近大人と子どものけじめが付かなくなり幼稚な大人が増えたのは死と再生の成人儀礼がきちんと行われなくなつたせいかもしれない。往生の原語は再生を意味し、回心も精神的な再生を意味する。生命体としてのわれわれ人間は生き死ぬ限りについて

根源的に宗教的たらざるを得ないのである。されば宗教を無視、軽視、排除することなくもつと真摯に取り組むべきではないかと思われる。

逆境にあつて死・滅の不安や孤独を恐れ苦悩する人間にとつてならんかの宗教なしには生きられないとすれば、人類の環境破壊や宗教的対立による迫害・戦争・絶滅を防ぐためにも、生命そのものの原点に返り宗教を再検討することが必要ではなからうか。その時世界の民衆の中に深く息づいているアニミズムに帰り、人間の生命だけでなく自然の生命、宇宙の生命原理に基づく新たな人類共通の宗教を創出することが必要であろう。また現在世界に存在する様々な宗教も万物の生命を畏敬・崇拜し、その繁栄・存続を願ひ、その絶滅を防護するという点において協同・連携することができのではなからうか。現代の青少年の心の空白、霊魂や超能力への強い関心、偽教祖や霊能者の跋扈をみるとき正しい宗教教育の重要性を痛感するが、その基盤となるべき宗教観は言うまでもなく既成の宗教ではなく、万物の生命への畏敬・帰依の心情に基づくものでなければならぬであろう。かかる観点に立つとき、梅原氏の指摘の通り、縄文人の文化、アイヌや沖縄の宗教文化、日本古神道は多くの示唆を与えてくれるのではなからうか。

本調査研究の成果、特に写真は大学で担当する「死生学」や「人間の生と死」「実践的人間学」の講義に活用し、さらに各地での講演などでも公開し好評を得た。これから担当する「人間と宗教」「宗教倫理学」等においても有効に活用したいと思つてゐる。

沖縄を訪ねその風土に触れ人々と接している内に沖縄の魅力に取り憑かれることを「沖縄病」と呼ぶが、実際沖縄の虜となつて移住し民宿などを開いている人に何人も会つた。筆者も沖縄各地を歩いて豊かな自然と厚い人情、奥深い文化に接している内に沖縄病に罹つたようである。しかし、沖縄戦、米軍支配、本土復帰後の急激な開発と観光化によつて、自然は荒らされ人々は勘定高くなり、仲松弥秀氏が名著『神と村』の最後で嘆かれているように「神は遠く、

遠くへ去つていく！」感じを持たざるを得なかつた。過疎化が進み御嶽は荒廃し、著名な御嶽すら知らない若者が増えている。とはいへ日本本土には少ない心の交流と情けと安らぎが豊に見られる。それはやはり沖縄の人々が神々と生き、その祭りによつて強く結ばれていることによるのであろう。

本調査研究に当たつて、その著書論文により有益な教示を与えて頂いた(煩雑になるため参考箇所は一々明記しなかつたが)多数の先達の方々に、また道案内や面接によつてご協力頂いた沖縄の方々に、特に調査の有益な指導助言を頂き何かと御世話いただいた石川友紀琉球大学教授に、心から御礼申し上げたい。さらに本研究推進のために岡山県立大学内地研修制度により助成を与えられた。記して謝意を表したい。

参考文献

- 小口偉一他監修『宗教学事典』東京大学出版会一九七三
 広松涉他編集『哲学・思想事典』岩波書店一九九八
 福田アジオ他編『日本民俗大辞典』吉川弘文館二〇〇〇
 沖縄古語大辞典編集委員会編『沖縄古語大辞典』角川書店 平成七年
 沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』
 沖縄タイムス社一九八三
- 岡野屋正男刊『世界大百科事典』第二版平凡社一九九八
 寺崎昌男編『教育名言辞典』東京書籍一九九九
 小原國芳編『真人のことば』玉川大学出版部昭和五七年
 岸本英夫著『宗教学』大明堂一九六一
 岸本英夫著『宗教現象の諸相』大明堂一九七五
 岸本英夫著『世界の宗教』大明堂一九六五
 堀一郎著『日本の宗教』大明堂一九八五
 エリアーデ著『世界宗教史』全三巻筑摩書房一九九一
 NHK取材班編『脳と心』全八巻日本放送出版協会一九九三

- 柳田国男著『柳田国男全集』筑摩書房一九九八
折口信男著『折口信男全集』中央公論社一九九六
芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第十一卷「南島芸能」
三一書房一九九五
- 高宮広衛監修『沖縄県風土記』旺文社一九九三
牧野昇他監修『江戸時代人づくり風土記』沖繩 農文協一九九三
沖繩タイムス社編『おきなわの祭り』沖繩タイムス社一九九一
仲松弥秀著『神と村』臬社一九九〇
仲松弥秀著『うるまの島の古層』臬社一九九三
仲松弥秀先生傘寿記念論文集刊行委員会編『神・村・人』
第一書房一九九一
- 湧上元雄『沖縄民俗文化論』榕樹書林二〇〇〇
窪徳忠他著『沖縄の宗教と民俗』第一書房一九八八
平敷令治著『沖縄の祭祀と信仰』第一書房一九九〇
知名定寛著『沖縄の祖先祭祀』第一書房一九九五
酒井卯作著『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房昭和六二年
渡邊欣雄著『沖縄の社会組織と世界観』新泉社一九八五
渡邊欣雄著『風水思想と東アジア』人文書院一九九〇
小野重朗著『神々と信仰』第一書房一九九二
桜井徳太郎著『沖縄のシャマニズム』弘文堂昭和四八年
下野敏見著『南西諸島の民俗』I・II法政大学出版局一九八〇
伊藤幹治著『沖縄の宗教人類学』弘文堂昭和五五年
東京都立大学南西諸島研究会編『沖縄の社会と宗教』
平凡社一九六五
- 河村只雄著『南方文化の研究』講談社一九九九
又吉正治著『先祖のたたりと御願』月刊沖繩社一九八七
又吉正治著『マブイとユタの世界』月刊沖繩社一九八七
大林太良他編『日中文化研究五・アジアの中の沖縄文化』
大林太良著『海の道・海の民』小学館一九九六
大林太良著『北の神々・南の英雄』小学館一九九五
本田安次著『沖縄の祭りと芸能』第一書房一九九一
比嘉康雄著『神々の原郷久高島』上下第一書房一九九三
仲原善秀著『久米島の歴史と民俗』第一書房一九九〇
比嘉豊光著『光るナナムイの神々』風土社二〇〇一
窪徳忠著『沖縄の民俗とそのルーツ』沖繩出版一九九〇
比嘉康雄著『日本人の魂の原郷・沖縄久高島』集英社二〇〇〇
谷川健一著『神に追われて』新潮社二〇〇〇
谷川健一著『沖繩・その危機と神々』講談社一九九六
斉藤忠著『東アジア葬・墓制の研究』第一書房一九八七
千田稔編『環シナ海文化と古代日本』人文書院一九九〇
赤田光男編『祖霊信仰』雄山閣平成三年
和田萃著『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』全三巻塙書房一九九五
林謙作著『縄文社会の考古学』同成社二〇〇一
渡辺仁著『縄文土偶と女神信仰』同成社二〇〇一
金子昭彦著『遮光器土偶と縄文社会』同成社二〇〇一
小林達夫著『縄文人の世界』朝日新聞社一九九六
朝日新聞社編『三内丸山遺跡と北の縄文世界』一九九七
大阪府立弥生文化博物館編・刊『縄紋の祈り・弥生の心』一九九八
大阪府立弥生文化博物館編・刊『神々の源流』二〇〇〇
よねしろ考古学研究会編・刊『大湯環状列石』一九八六
山田芳和編『真協遺跡』一九九二
小林達夫他著『世界史のなかの縄文』新書館二〇〇一
中西進著『古代日本人・心の宇宙』NHK二〇〇一
- 大林太良他編『日中文化研究九・環東シナ海の比較文化』
勉誠社一九九六

- 今村啓爾著『縄文の実像を求めて』吉川弘文館一九九九年
 湯浅泰雄著『古代人の精神世界』ミネルヴァ書房一九九八年
 小山修三著『進化する縄文学』ベネッセ一九九八年
 岡本勇著『縄文と弥生』未来社一九九八年
 熊本県立装飾古墳館編・刊『舟と馬と太陽と』二〇〇三年
 梅原猛著『共生と循環の哲学』小学館一九九六年
 西郷信綱著『日本人のあの世観』中公文庫一九九三年
 藤森裕治著『死と豊饒の民族文化』吉川弘文館二〇〇〇年
 三宅和朗著『古代の神社と祭り』吉川弘文館二〇〇一年
 岩谷慶治著『カミと神』講談社一九八九
 宮家準著『日本の民俗宗教』講談社一九九四年
 諏訪春雄他著『訪れる神々』雄山閣平成九年
 山折哲雄著『鎮守の森は泣いている』PHP研二〇〇一年
 山折哲雄著『宗教の力』PHP研究所一九九九年
 吉野裕子著『日本人の死生観』人文書院一九九五年
 配山実著『古事記の凄さ』日本国書刊行会二〇〇二年
 河合隼雄著『日本神話の思想』ミネルヴァ書房一九八三年
 五来重著『葬と供養』東方出版一九九二年
 須藤功著『葬式・あの世への民俗』青弓社一九九六年
 大護八郎著『石神信仰』木耳社昭和五七年
 谷川健一編『巫女の世界』三一書房一九八九
 櫻井徳太郎編『シャーマニズムとその周辺』第一書房二〇〇〇年
 岡部隆志著『シャーマニズムの文化学』森話社二〇〇一年
 池上良正著『民間巫者信仰の研究』未来社一九九九年
 山上伊豆母著『巫女の歴史』雄山閣平成六年
 前田卓著『祖先崇拜の研究』青山書院一九六五年
 西岡秀雄著『日本性神史』高橋書店昭和三十六年
 田中公明著『性と死の密教』春秋社一九九七年
- 笠間良彦著『性の宗教』第一書房昭和六三年
 ダニエル著『ファロスの神話』青土社一九九六年
 佐野賢治著『星の信仰』北辰堂一九九四年
 高橋美由紀著『伊勢神道の成立と展開』大明堂平成六年
 筑紫申真著『アマテラスの誕生』講談社二〇〇二年
 櫻井治夫著『蘇るムラの神々』大明堂平成四年
 岩田慶治著『カミと神』講談社一九八九
 大野晋著『日本人の神』新潮社平成一三年
 金子裕之編『日本の信仰遺跡』雄山閣一九九八年
 中村生雄著『日本の神と王権』法蔵館一九九四年
 王守華『日本神道の現代的意義』農文協一九九七年
 菅野寛明著『神道の逆襲』講談社二〇〇一年
 薬師寺慎一著『吉備の中山と古代吉備』吉備人出版二〇〇一年
 エリアーデ著『生と再生』東京大学出版会一九七一年
 日野九思著『迷信の解剖』昭和六一年

二〇〇二年 十月三十一日受付
 二〇〇二年十二月二十五日受理